

大きな影響を与えるであろうことが推察され、非常に重要である。多くの場合、多額の費用を掛けて、会堂を大きくする道を余りにも当然のごとく選んでいるようだが、それがこの拡大伝道を断念、或は無視してしまふことになってはいいのだろうか。(ルカ十二・十六―二二参考) どのような道が最善であるのか、教会の宣教のヴィジョンに合わせ十分に考える必要がある。

5、成熟・子(枝)教会開拓期……開拓から一五年、活動教員数七十人の教会を考えると、教会は成熟度を増し、活動のエネルギーに満ち、また各階層(壮年、婦人、青年、学生など)は充実した交わりを経験する、もっとも良い時期とも言えるであろう。その様な時期こそ、新しい教会を生み出すのに最良の時である。E<sub>1</sub>の範囲を越えて、E<sub>2</sub>伝道ができる体勢が整ったのである。慣れ親しんだ表現で言えば、一地方教会による開拓伝道の推進である。しかしこの場合、教団レベルでの開拓伝道とは異なった方式が考えられて然るべきであろう。ここで筆者の属する日本バプテスト教会連合が推奨している「衛星教会方式」を紹介したい<sup>⑥</sup>。従来の開拓伝道による教会形成方式によると、最初は、母となる教会或は教団が、人的にも経済的にも支援し、ある時期がくると開拓教会は、人的、経済的だけでなく組織的にも独立した教会となる。それに対して衛星教会方式の場合は、文字どおり衛星のように母教会とのつながりを維持していく。その特徴的な関係は「セミオートノマス(半自治)」と呼ぶのがふさわしく、完全な独立でもなく、さりとて単なる主従関係でもない、双方にとって良い生きた関係を、人的、経済的、組織的に持ち続けるのである。その利点としては、(i)教会を速く、方々に建てることができる。(ii)必ずしも、フルタイムの教職者、専用の土地建物が必要としない。(iii)単一教会ではむずかしかった大きなヴィジョンを持つことが可能になる、等があげられる。従来の開拓伝道が、人的、経済的に大きな限界がある今、この種の開拓伝道がもっと研究されるべきではなからうか。

6、停滞(衰退予兆)期……教会が、ある種の人々のリーダー・シヨブ(牧師だけでなく、長老、執事・役員、そして、中心的な奉仕者をも含めて)によって運営されている以上、成熟のあとに停滞、あるいは徐々に衰退期が来ることは否定できない現実であろう。もちろん、リーダーシップの世代交代をうまくやることによって、この停滞・衰退期を跳び越えて再生期に移行させることは可能であるし、賢明なことである。しかしそれは継続的な成長ではなく、次世代の人々による別の教会が生まれたと理解すべきである(たとえ、教会の名前、建物、プログラム、そして教会員の大半が依然同じであろうともである)。現実には、成熟期の状態に満足したり、衰退の現実認識から無意識的に逃避したりして、無策にではないにしても長期の停滞・衰退期を経験する教会も少なくないように思える。注意すべきは、あまりにもこの時期が長くなると、再生に非常な労力を要するばかりか、もはや再生不可能にさえなりかねないことである。この時期に、熟練した牧師に加えて、若くて、次の世代を指導すべき副牧師、青少年担当牧師あるいは教育主事などを迎えることは、一つの意味ある対策と言えよう。ともかく、この時期の教会にとってそれまで中心であり続けた教員を牧会することは、それがどんなに時間と労力を必要としても切り捨ててはならないと同時に、この世代からのもはや大きな成長は望めないことを認めて、次世代のグループの育成に努力すべきであろう。

7、再生期……開拓から三十年、或は四十年を経た教会は、三十才から六十才のもっとも中心的な年齢層に属する人々が全く入れ替わっているのである。またそれは、個人が入れ替わったばかりでなく、異なった時代感覚やライフスタイルを持った世代への移行でもあるので、教会のヴィジョン、理念、そしてプログラム、組織などがその新しい世代に合ったものになるまでにはある程度時間もかかり、産みの苦しみのようなものを経験するのが当然であろう。しかも、それまでの教会が良い教会であったほど、良い伝統と遺産を持っている反面、それだけ産みの苦しみが大きいことが想像される。残念なことには、この再生を果たせなかつたために、大きく、立派な教会堂という屍を曝

している教会（それはもはや教会ではない）も世界には多いのである。それ以上に多くの教会は、死んでしまっていないが、6の衰退期を何十年（何世代）にもわたって経験し、有効な再生を経験しないで徐々に死に向かっていると思われる。しかし私達の神は、その様な教会の持つ人間的な悲しい限界の中でいつも新しい教会を生まれさせ、リヴァイヴして下さってきたことを思うとき、主の御名を賛美せずにはいられないのである。この時期、私達は余りにも保守的にならないで、神の毎日に新しいみ業による命の息吹を受け入れる者でありたいものである。（マタイ九・一七参照）このようにして再生した教会は、おそらくはまた、3、4、或は5の段階からのサイクルを繰り返していくであろう。

以上、一地方教会のライフ・サイクルを素描してきたが、この様な分析は取り立てて目新しいものではなくとも、教会形成を教会成長学の童話的な理解によって行わないために大切だと思ふのである。童話はほとんど例外なく、「こうして王子様とお姫様は、いつまでも仲よく暮らしました。」とか、「こうして桃太郎は、いつまでもおじいさんとおばあさんと一緒に、幸せに暮らしましたとき。」というような、非現実的な楽観論で終っている。しかし、現実の世界には、問題があり、老衰があり、死別がある。その世界の中で私たちクリスチャンは、よみがえられた主イエスの故に死に勝利している。だから死の現実を直視できる。死を越えて働き続けておられる主を信じていることができる。主イエスご自身がその真理を、「一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。」（ヨハネ一二・二四）と語られ、私たちの考えを遙かに越えた、死の持つ意義の大きさを教えられた。事実主イエスの死ばかりでなく、教会史に於ても、殉教者の血が次ぎなる時代の教会の再生、あるいは成長の契機となったことが少なくないのである。それは地方教会の形成においても同様ではなからうか。真の教会形成者にとって大切なことは、教会の成長、成熟だけを追い求めるのではなく、衰退（ある時には死滅）という現象にも目をつぶらないで現実を見つめていくこと。しかしそれにもまして、教会の主としてその歴史を支配し、新しい命に満ちた教会を起こし続けておられるお方に目を注いで、与えられた馳場を忠実に走り抜くことではなからうか。（一コリント、四・一一五参照）

### 三、教会形成の形態的諸類型

この十数年、伝統的、制度的な教会に対する様々な面での刷新の必要性が叫ばれている。福音主義側からは、H・スナイダーの一連の著作「皮袋の問題」<sup>⑩</sup>、「王のコミュニティ」<sup>⑪</sup>や、D・ブローシュの「教会の改革的形成」<sup>⑫</sup>などに見られるし、初代教会についてのこの視点からの基礎的研究としてはM・グリーンの「初代教会における伝道」<sup>⑬</sup>やR・パンクスの「パウロのコミュニティ観」<sup>⑭</sup>などが公けにされてきた。また、立場は異なるが日本の教会との交流もあったE・ブルンナーも、今やクラシック的な「教会の誤解」の中で教会のラディカルな刷新を訴えていたのである<sup>⑮</sup>。更にカトリックの中においても、H・キュンクの「教会論」のような著作に同様な意識を見ることができ<sup>⑯</sup>。現代における教会は、教会の本質をよく体現しながら、しかも現代社会に適應するような形態的あり方が問われていることを真剣に受けとめるべきではなからうか。

一方、実際的にはR・シュレーラーがあのだンググループ・コミュニティ・チャーチ方式を採るようになったヒントがドライブイン・シアターであったことは余りにも有名である。また、折しも教会成長運動が盛んになるにつれて都市郊外の新興住宅地に建てられ急成長した教会が注目されて、東西いずれにおいても多くの追従者を生んだが、その考え方が、スーパー・マーケットのそれと非常に似ていると感じたのは筆者だけであろうか。このような現実を觀

察するとき、教会の外形的形態はその時代に有力な社会的機構の形態、或は人々のライフ・スタイルに大きく影響を受けているのではないかとの問いを抱かざるを得ない。そしていわゆる成長している教会は、それらに敏感で、うまく教会形成に取り込んでるように思えるのである。このようなことを私達はどの様に評価すべきであろうか。ここでは現代の日本にあって教会はどの様な形態を採りうるのか、どの様な形態がふさわしいのかを实际的に考えてみたい。

#### A 教会の形態は、時代とともに変わりうるか。

まず、使徒の働きの教会形態を見てみよう。最初のエルサレムの教会では、日々、神殿とともに家々で集まっていた。その後エルサレムから散らされた教会がディアスポラのユダヤ人を中心に伝道した時期は、彼らの会堂（シナゴグ）がよく用いられた。さらにギリシャ・ローマ世界の異邦人中心の教会になると、それはいわゆる家の教会となった。教会の政治形態としては、ユダヤ教の長老制による影響が強かったようであるが、一般的には、彼らは教会の形態においては非常に自由にふるまったと言つてよい。そのことは、教会の本質はその形態（皮袋）にあるのではなく、その中に抱えているいのちの福音（ぶどう酒）であることをよく承知していたからである。そして、時代と状況の変化にともなつて、命に満ちたぶどう酒が、古い皮袋では耐え得ないとみるや、新しい皮袋と交換していったのである。

ところが、時代が下がって教会がカトリック化してくるにしたがい、教会のヒエラルキー化が起こり、その教会の機能は神秘宗教の神殿と祭司のようなものとして固定化していった。同時に教会は礼拝のための専用の建物を持ち始めるようになったことは興味深い。以降のカトリック教会においては、様々な改革運動を持ちつつも、基本的にはこの教会形態が現代にまで及んでいるといえる。十六世紀の宗教改革によって生み出されたプロテスタント教会においては、これを聖書の權威、信仰による救い、万人祭司、そして教会機能のシナゴグ化とラディカルに改革したが、様々な点で新たな硬直化現象が見られるという見方も一概に過ちと片付けられないであろう。そして現代においても、教会はカトリック、プロテスタント双方とも、ぶどう酒である教会の本質だけでなく皮袋である教会形態までも無批判に継承していく傾向が少なからずあるように見える。初代教会のあの自由さ、宗教改革者のあのラディカルさはどこにいったのであろうか。そのような中で近年、前述した教会刷新運動、教会成長運動やカリスマ運動などによって、教会の本質を失わないで、いや、教会の命を溢れ出させることのできる今日的な教会形態を問い直す気運が出てきていることは、相応に評価すべきではなからうか。

ここで教会の本質についての議論を展開する余裕はないが、教会の形態の必須要素（本質と不分離な基本原則）について聖書から確認しておくことは大切である。H・スナイダーは、新約聖書にみられる教会のもっとも基本的な要素として、御霊の賜物に基づくリーダーシップ（Leadership）、スモールグループによる交わり（Fellowship）、比較的多人数による共同体的礼拝（Worship）の三つを挙げている。一方初代教会の家の教会を研究したR・パンクスは、家の教会では通常、礼拝共同体と交わりのグループは区別されないで、四十人から四五人くらいのコミュニティーを形成していたであろうと推測している。またP・ワグナーは、現代のアメリカの教会を観察して、教会の形態的基本要素として、3C（Cell group＝細胞、Congregation＝会衆、Celebration＝祭典）に分析してみた。この会衆は、百人規模の日曜学校などが意味されていることから、スナイダーのリーダーシップ（牧師、教師たち）の果たす機能とほぼ同じことが考えられていると思われる。そうであれば、聖書的で、かつ現代日本の教会への適用が考えやすいスナイダーの表現が、もっともふさわしいであろう。教会は、これらの必須要素―それは教会の本質、命と不

可分に結びついている―を決して失ってはならないどころか、それらを十分に發揮できるところの今日的形態を求めているといえよう。

## B 現代教会の諸形態―商業モデルの類比による―

以上の必須要素を盛り込みつつ、具体的にはどのような教会形態が可能であろうか。どのようなものが現代のわが国にあってふさわしいであろうか。まず従来の日本におけるプロテスタント教会の採ってきた伝統的な教会形態、そして現在現れてきている比較的新しい教会形態を、商業モデルの類比をもって類型化してみたい。

1、小売商店型……これは、全国にわたって従来からもっとも多く、現在でも非常に支配的な形態である。ある地域にあって、小さな土地と牧師館兼会堂を持ち、フルタイムの牧師夫妻が教会にあたっている。主日には二十―四十人が礼拝に集まり、家族的で日本人に合っているとも言えよう。しかしこのような教会は、一地域一教会一牧師が原則で、隣の教会との地割が暗黙の了解となっている場合もあり、拡大成長するのに困難な体質を持っていることが多い。

2、デパート型……比較的早期に建てられた都市にある教会の形態がそれである。

教会の歴史があり会員も多い。会堂も立派で牧師の知名度も高い。かなりの会員たちは、公共交通機関を使って、主日毎に一時間以上かけて通う。ここでは、質の高い礼拝が行われる良さがあるが、各々の生活圏が遠いことが多く、また会員の流動性も高いので、日常的交わりが薄くなる傾向がある。教会が大きい割には、地域への宣教になかなか力が発揮できない。

3、駅前専門店型……交通の便利さを優先して駅の近くに建てられた、余り大きくない教会。小さい会堂かビルの貸し部屋を多目的に利用している典型的な都市の教会が想像される。会員たちは、バス、電車などを利用して主日の礼拝だけでなく、週日の祈禱会などにも通ってくる活発な教会である。この種の教会は、地域的にはかなり広い範囲から集められた、一つの文化的個性の強い(均質性の高い)教会であり続ける傾向がある。なぜなら、多くの人はこの教会が自分に合うから来るのであり、教会もその様なやり方である程度の人数を集めることができるからである。したがって、その地域への浸透はいま一つである。また、ここでは土地が高いために物理的な制約を強く受け、これが教会成長の大きなネックになるかもしれない。

4、スーパーマーケット型……最近急成長している教会の多くが属する型である。郊外の新興住宅地の成長を狙って、まだ余り高くない土地を広く手にいれて、大きくきれいな会堂を建てる。転居してきた若いサラリーマン夫婦や、婦人が中心で、主日の礼拝や週日の祈禱会などには、マイカーで教会にくる人が多い。教会は、音楽、映画、食事などを交えた良いプログラムを用意して人々を教会に惹きつける。教会のスタッフも牧師以外に一人二人いる場合がかなりある。現代においては、もっとも効果的な教会形成法の一つと言われてきたが、いくつか考えておくべき問題もあるように思える。それは、数量的な成長を誇りとしやすいこと、二十才代から四十才代の中流サラリーマン家族という均質的教会となりやすいこと、土着の人々や伝統的文化と関係の薄い生活をしている人々による根の浅い教会で満足しやすいことなどである。また、ますます土地と建物に多額の資金が必要になっていることも黙殺できない。

次に述べる二つの型は、ある程度これまでも試みられてきたが、教会形成の方策としては未熟で、なかなか注目されるまでには至らなかったものである。その共通する理念は、初代教会の「家の教会」をモデルにしていること、地域社会(生活の場)にできるだけ多くの教会を建てることを目指していること、不動産に無理な投資をしないこ

と、信徒の牧会伝道者の働き場を拡大することなどである。筆者の奉仕している教会での試みをも含みながら、これらの形態の可能性を問うてみたい。

5、コンビニエンス・ストア型……これは、小売商店型や駅前専門店型の親密な交わりを持ち、デパート型やスーパー・マーケット型の地域的広がりをも持つ可能性もあり、さらに人々の生活の場への接近を狙ったものである。一つの町レベル毎に礼拝所を設け、(ある場合は、それは住宅であり、貸しホールであり、小さな専用教会堂である)<sup>④</sup>それらは互いに車で一五—三十分くらいの距離で、あまり離れてはいない。各々の礼拝所は、群れのリーダーとして信徒の牧会者が立てられるが、それらは独立の教会ではなく一つの地方教会の枝々である。専任の牧師はそれら全てに対して責任を持つが、それは全ての説教を担当することを意味せず、信徒の説教者をも用いる。ほとんどの信徒たちは一〇分内外で礼拝に集えるし、その人数は、三十人ほどで、家族的な交わりができる。一方、時々合同の集会を持って、大きく質の高い礼拝も体験できる。とは言ってもこの方式がうまくいくための課題もいくつか考えられ、その最大のもは、献身的で賜物を与えられている信徒の牧会伝道者、説教者の育成である。そして無視できないのは、ほとんどの信徒が持っている「教会は、独自で専用の建物と専任の牧師を持っていないと半人前である」という根強い教会堂、教職者指向性からくる消極性や反発である。これらの課題を乗り越えられるならば、この型は大部分の地域にあって可能と思われる現代版「家の教会」の好例となりえようが、まだ試みの域を出ていないのが実状である。

6、出張(巡回)販売型……上と同じ発想であるが、もっと広範囲の地域を伝道対象と考える過疎の農林漁村などにある教会では、少しタイプの違う型が有効かもしれない。この様な地域で五人—十人の群れが生まれてきた場合、それには伝道所、あるいは、地域(家庭)集会の名が与えられ、そのまま教会であるとは自他ともに認めがたかったのではなからうか。確かにそこに指導者がいない場合はそれ単独では教会としての機能を十分に持ちにくい、この様な群れがあちこちと生み出されて、それらが一つの教会として組織されていく可能性があるのではないか。一人の教職者が一週間をかけて一つ一つの群れを回って、礼拝を導き、教育、牧会をする。ある群れは月曜日、他の教会は土曜日の夜(あるいは、朝、あるいは午後)が礼拝の時となるという具合で、場所は主に家庭が用いられる。これまでの既成概念では教会形成が殆ど不可能であった地域で試みられて欲しい形態であるが、この場合は、信徒よりも教職者自身の意識における戦いが非常に大きいことが予想される。専用の会堂を持たないで毎週出張という、平均的な牧師とは異なった生活をも含めて、このような教会観に確信が持てるかなどである。

以上の中で、どの形態が最も良いとは一概に言うことはできないであろう。個々の教会の置かれている具体的な環境はすべて異なるのであるから。この分析と類型化が、聖書的かつ創造的な教会形成に向かっていくらかの刺激になればと思うものである。

## 結 び

戦後のわが国においてかなりの成長をしてきた福音主義キリスト教も、最近成長の鈍化あるいは停滞現象が取り沙汰されるようになってきている。また神学的には、宣教論におけるコンテクスチュアリゼーションが注目されている。そのような今日、現代日本社会に適応した宣教的な教会をいかにして数多く全国的に生み出していくかということが、福音主義教会の緊急かつ最大の課題の一つではなからうか。本論はこの課題についての小さな問題提議に過ぎない。新しい時代に向かって、いのちの福音や教会の本質においては、それを堅く保ちつつ、宣教と教会形成の実践においては敢えて冒険を試みる福音主義者が起こされることを願い、結びの言葉としたい。

注

- ① C・W・ウイリアムズ『教会』(新教出版社、一九六九)二二―五頁参照。
- ② Howard A. Snyder, *The Community of the King* (Downers Grove: Inter-Varsity Press, 1977), pp. 103-104.
- ③ 出エジプト記三章一二節、使徒の働き一章四―四七節など参照。
- ④ ジョン・ストット『ローザンヌ誓約―解説と注釈』(じのまのことは社、一九七六)
- ⑤ Millard J. Erickson, *Christian Theology*, Vol. 3 (Grand Rapids: Baker Book House, 1985), pp. 1052-1059.
- ⑥ カルヴァン『キリスト教綱要』Ⅱ(カルヴァン著作集刊行会、一九六二)三〇八頁。
- ⑦ カルヴァンとそれ以降の教会は、キリストの三職から出た教会の職務をいう時、教会の内的生命と関連をさせて、「教会は、み言葉が真実に説教され(預言者)、礼典が正しく執行され(祭司)、敬びんな訓練が行われる(王)ところにある」と解釈され、それが教会の世に回かつての職務執行の準備であることが忘れられていた。ここでは、それを教会の対世界的な使命として理解しようとしている。(C・W・ウイリアムズ『教会』二二頁参照。)
- ⑧ A・リチャードソン『新約聖書神学概論』(日本基督教団出版局、一九六七)五〇九―一〇頁。ただし、彼は信徒の祭司性に関連してこの語語しているが、むしろ奉仕的教会の概念に属していると思ふ。
- ⑨ ジョン・ストット『ローザンヌ誓約―解説と注釈』四三頁。
- ⑩ 前掲書 六三頁。
- ⑪ 前掲書の解説部分にある「伝道への導入」「伝道の結末」(四八―五二頁)参照。
- ⑫ Donald A. McGavran, *Understanding Church Growth-Fully Revised* (Grand Rapids: W. B. Eerdmans, 1980), pp. 41-45.
- ⑬ 拙文「教会成長運動は聖書的か―その神学の序論的考察―」(日本福音主義神学会中部会第一回研究発表会講演集)(一九八二)参照。
- ⑭ Donald McGavran, *Understanding Church Growth*, pp. 69-72.
- ⑮ *Ibid.*, pp. 55-56.
- ⑯ 高橋宏『病気と社会』(キリスト教図書出版社、一九八五)の「癌―生命の秩序の破壊者―」の項(五五―八一頁)参照。
- ⑰ 三ツ橋信昌『衛星教会について』『連合通信』(九九、一〇〇号)(日本バプテスト教会連合、一九八五)参照。

- ⑱ Howard Snyder, *The Problem of Wine Skins* (Downers Grove: Inter-Varsity Press, 1975)
- ⑲ Howard Snyder, *The Community of the King*.
- ⑳ D・トローント『教会の神学的形成』(新教出版社、一九八二)
- ㉑ Michael Green, *Evangelism in the Early Church* (Grand Rapids: W. B. Eerdmans, 1970)
- ㉒ Robert Banks, *Paul's Idea of Community* (Grand Rapids: W. B. Eerdmans, 1980)
- ㉓ エドワード・ブルンナー『教会の誤解』(待農堂、一九五五)
- ㉔ ハンス・キントク『教会論』上、下巻(新教出版社、一九七六)
- ㉕ Robert Banks, *Paul's Idea of Community*, pp. 30-31, p. 112.
- ㉖ *Ibid.*, p. 41.
- ㉗ *Ibid.*, p. 112.
- ㉘ Howard Snyder, *The Community of the King*, pp. 143-147.
- ㉙ Robert Banks, *Paul's Idea of Community*, pp. 41-42.
- ㉚ C・ピーター・ワグナー『教会成長のかぎ』(聖書図書刊行会、一九七八)一五五―七五頁。
- ㉛ このために筆者の奉仕している緑バプテスト・キリスト教会では、献身的な信徒がマイホームのための土地を取得することを奨励し、その上に三十人規模の集会所と住宅を教会の経済的支援をもって建てる「マイホーム・チャーチ運動」を始めている。
- ㉜ 一地方教会ではなかなか難しいこのレベルの教会奉仕者の訓練ができる場として、名古屋に超教派の教会協力による東海聖書神学塾があることは感謝である。この神学塾は、教職志願者コースと共に信徒リーダー・コースを持っているが、従来の神学校の信徒コースと違うところは、入塾志願者に教会建設への明確な使命感があり、送り出す教会側にも将来の彼らの働きに明確な期待があるのでなければ、決して入塾を認めないことである。ここでは焦点が教会形成に絞られており、その点では教職と信徒の区別をあまりしない。

(東海聖書神学塾塾生主任)

緑バプテスト・キリスト教会牧師)